

あるべき共同体～序～

- 0、はじめに
- 1、現状
- 2、特殊の肯定
- 3、共同体考察
- 4、最近のコミュニタリアン
- 5、まとめ(あるべき共同体)
- 6、おわりに

0、はじめに

- ・武田鉄也から学ぶ

1、現状

格差社会⇒2つのナショナリズム

◇「上からのナショナリズム」

ネオリベへの反発：ネオコン

◇「下からのナショナリズム」

ネオリベの副産物：ワーキング・プア

☆現代こそ共同体が求められている時代である

2、特殊の肯定

2-1、「善」と「悪」

<ニーチェ>

「善」を絶対化して「悪」を排除してはならない

- ・「善」＝真理、普遍、単一性、明示性、意識
- ・「悪」＝誠実、特殊、多様性、暗黙性、無意識

☆「善」と「悪」は相互補完的關係である

2-2、特殊の肯定

☆自己肯定＝特殊の肯定＝人のまねではない(「明」でも「暗」でも可)

Cf.啓蒙思想家：合理主義のみを肯定(非近代を否定；「悪」の克服)

3、共同体考察

3-1、啓蒙思想家

- カール・R・ポパー：個人主義と利他主義は共存する

啓蒙思想・・・「非近代的」なものを排除し、ユートピアを実現⇒共同体の消失

- 「所有」 ⇔ 「関係」

☆「関係」の構築に打ち込んでいる限りは「所有・獲得」には興味を示さない

- T・E・ヒューム「連続の原理」

(1)

(2)

(3)

☆(1)～(3)は互いに「不連続」の状態にならなければいけない

△(1)と(2)の「連続」⇒社会主義や資本主義の「真理」や「完璧性」

3-2、共同体考察

- ジョン・グレイ：市場主義と共同体とは両立する

共同体→<束縛>→「歪」でない個人⇒真の近代化

☆共同体なくしての自己(=啓蒙思想家の考え)は「歪」である

- ジョージ・ソロス

⇒(啓蒙思想家の言う)「束縛されない個人」こそが(社会的に孤立させられた)

「束縛された個人」となる

- エドワード・ゴールドスマス

⇒共同体の規制や束縛は社会や家族・生活、さらには経済を防衛するためにも
不可欠であった。

▼まとめ

啓蒙思想・・・物質的領域のみに限らず、精神的領域(「内面世界」)にまで浸透してくる

⇔

共同体・・・「内面世界」を豊かにする

3-3、より良い共同体をめざして

- エドモンド・バーク・・・「権利」は「中間物」である

△「中間物」；それ自体「真理」ではなく、各人に利益を与えるが、時に「道徳的政治的には虚偽となる」

<あるべき姿>

- マックス・ウェーバー・・・宗教というソフトパワーによって資本主義的経済組織は根底を成す

☆「ソフトパワー ⇒ ハードパワー」となるべき

- ジョージ・オーウェル

- ・ナショナリズム=攻撃的
- ・愛国心=保守的

ハードパワー⇒内面の「特殊」の喪失⇒積極的に外部へ自由を求める「戦闘的奴隷状態」
⇒・・・⇒「世界奴隷化の思想」⇒「自由そのものに対する暗殺計画」

☆保守的な共同体こそ良い

4、最近のコミュニタリアン

4-1、コミュニタリアンの立ち位置

「リベラル・コミュニタリアニズム」・・・中道左派

4-2、3人のコミュニタリアン

<①アラスティア・マッキンタイア>

「外的な善」ではなく、「内的な善」を求めるべき

☆人間は「家族、近隣、都市、部族などのコミュニティの一員であることに埋め込まれ、政治的コミュニティにおける「共通の事業」としての「善き生」を目的とすべき

↑アリストテレス的な「原コミュニタリアニズム」を提唱・・・「普通の人々」の熟考

<②チャールズ・テイラー>

人間は自己の属するコミュニティの中で、言語を通して自己解釈していく存在である

- ・自己の欲求の量的な区別＝「弱い評価」
- ・ 〃 質的な 〃 ＝「強い評価」⇒自己アイデンティティ形成

☆「共有された善」を掲げる

<③マイケル・サンデル>

- ・「負荷なき自我」⇔「位置ある自我」
- ・リベラリズムやリバタリアニズム＝「正義(＝権利)」ばかりを擁護
「正義」の前提となる「善」を軽視
- ・「中間的な形態」のコミュニティ⇔「企業経済」「官僚制国家」
- ・公民的共和主義

☆1980s～のコミュニタリアニズム・・・「アリストテレス的『共通善』」の追求の重要性
「個人の利益ではなく、共同体の利益を！」

4-3、「共通善」考察

☆ 「共通善」＝・
・
・
+ 「精神的なもの」↓
・
・

☆コミュニタリアンの「共通善」・・・コミュニティが維持されていくためには、その成員に共通した伝統、利益、価値観などが前提として存在し、そのような前提から人々が熟議していくことによって、個々人の私的な利益ではなく、共通の利益をめざす政策がつけられる

- ・ 「公共善」・・・政治的エリートの政治的徳が体現するもの
- ・ 「共通善」・・・あくまで大衆に内在する共通の善

4-4、「共通善」の否定

トマス・ホッブス：社会契約論⇒孤立した原子論的な個人の利己心から形成される国家

現代の共同体批判・・・全体主義になるという批判

↑ BUT

共同体から根を断たれ、アトムの孤立した個人の不安と挫折感による

Cf. リベラル・・・個人の自由を尊重し、政治に参加するもしないも個人の意思に還元して

↓ しまう

政治的ニヒリズム+エリート政治の正当化

(個人の権利や自由は利己的なものでしかなく、「共通善」と対立する)

5、まとめ (あるべき共同体)

“free” の語源・・・“pre” 「(部族や周りにいる人との) 良き関係」(ゲルマン語)

☆共同体内の成員との生き生きとした感情の交流⇒真の個人

△グローバル化・・・啓蒙思想家の最終的形態 (by ジョン・グレイ)

▼共同体に必要なもの▼

1、「特殊」の肯定

2、「共通善」の追求

<日本の場合>

日本の近代化：反「内発的」(対応ではなく順応)

←日本の固有の価値を「非合理」であるとして否定

☆理想の姿勢・・・「和魂洋才」(「暗」を根源とし、「明」に対応する)

+「共通善」

6、おわりに

●シャントル・ムフの批判

↑

●Clue・・・①「共通善」の自己目的化

②シヴィック・ジャーナリズム

<参考文献>

菊池理夫『日本を甦らせる政治思想—現代コミュニタリアニズム入門—』2007年 講談社新書

平井亮輔編『自由』2004年 嵯峨野書院

照屋佳男『共同体とグローバリズム』2004年 成文堂

井上達夫『共生の作法—会話としての正義—』1986年 創文社

齋藤純一『自由』2005年 岩波書店

宮台真司・仲正昌樹『日常・共同体・アイロニー—自己決定の本質と限界—』2004年 双風舎

飛矢崎雅也『大杉榮の思想形成と「個人主義」』2005年 東信堂

竹村牧男・松尾友炬編『共生のかたち—「共生学」の構築をめざして—』2006年 誠信書房

M・J・サンデル著 菊池理夫訳『自由主義と正義の限界』1992年 三嶺書房

I・バーリン著 小川晃一・小池銈・福田歓一・生松敬三共訳『自由論』1971年 みすず書房

縫田清二『ユートピアの思想—個と共同の想像力—』2000年 世界書院

板垣哲夫『近代日本のアナキズム思想』1996年 吉川弘文館

藤原保信『自由主義の再検討』1993年 岩波新書

雨宮処凛・萱野稔人『「生きづらさ」について—貧困、アイデンティティ、ナショナリズム—』2008年 光文社新書

川崎修・杉野敦『現代政治理論』2006年 有斐閣

姜尚中・森巢博『ナショナリズムの克服』2002年 集英社新書

サミュエル・ハンチントン著 鈴木主税訳『文明の衝突と21世紀の日本』2000年 集英社新書

井崎正敏『ナショナリズムの練習問題』2005年 洋泉社

福田和也・香山リカ『「愛国」問答—これはナショナリズムなのか—』2003年 中央公論新社

中根千枝『タテ社会の人間関係』1967年 講談社

八木秀次『反「人権」宣言』2001年 筑摩書房

香山リカ『ぶちナショナリズム症候群—若者たちのニッポン主義—』2002年 中央公論新社

門倉貴史『ワーキングプア—いくら働いても報われない時代が来る—』2006年 宝島社

ジョージ・オーウェル著 川端康雄訳『水晶の精神—オーウェル評論集<2>』1995年 平凡社

長谷川一年『新自由主義』未刊

広井良典『定常型社会』2001年 岩波新書

橘木俊詔『格差社会 何が問題なのか』2006年 岩波新書

小林多喜二等『日本文学全集 37 小林多喜二・葉山喜樹・徳永直集』1970年 筑摩書房

高原基彰『不安型ナショナリズムの時代—日中韓が憎しみあう本当の理由』2006年 洋泉社

林信吾『しのびよるネオ階級社会—“イギリス化”する日本の格差』2005年 平凡社

暉峻寂子『豊かさとは何か』1989年 岩波新書

難波江和英・内田樹『現代思想のパフォーマンス』2004年 光文社新書